

研究生生活の回顧

著者	平野 蕃
雑誌名	農業経済研究報告
巻	12
ページ	1-7
発行年	1972-03
URL	http://hdl.handle.net/10097/33282

研 究 生 活 の 回 顧

平 野 蕃

学生時代のことは省略して、大学を卒えてからの研究生生活を勤務した機関別に回顧してみたい。

(1) 満鉄時代

昭和十年の春に、私は満鉄の経済調査会というところに奉職することになった。略して経調といっていた経済調査会は、一部から五部まであって、私は五部の植民班というところに配属された。植民班には、私の大学の先輩にあたる鈴木辰雄氏（現日大農獣医学部教授）がおられたが、満州国の臨時産業調査局（略して産調といっていた）の方に転出されたので、私は鈴木さんの後任として植民班に就職したわけである。

当時植民班の責任者（主任）は岡川栄蔵という方だった。岡川栄蔵さんについても、語りだしたら長くなるが、氏の経歴の一端を書きとめておけば、岡川さんは、苦学力行の士で、愛知県庁の農政課（？）に氏の表現を借りれば、「給仕」として奉職された由である。そのときの上司に、戦前私も名前だけは知っていた横尾惣三郎という人がおられ岡川さんは、横尾氏にたいへん可愛いがられたらしい。岡川さんの十五・六歳のころでもあろか。好學心にとんだこの少年を「お茶くみ」としておくことをおしんだ横尾氏の口ぞえで岡川さんは、大陸の新天地に新しい生活を求められたらしい。岡川さんの大陸における第一歩は、奉天郊外の日本の財閥経営の水田農場での農場経営の仕事だった。その体験をもとにして、この好學心にもえた少年は「満州における水田経営」（？）といった著書を書いて内地の出版社から出版されることとなった。昭和の初年のことと思うが、その出版によって、これまた岡川さんの表現によれば、「内地での三年間の勉学費をゆうにまかなえるに足る印税」が、少年のふところにころげこんだのであった。そこで、岡川さんは、宇都宮高農の農業経済学科に入学されることとなり、宿願の研究者としての研鑽をつまれることとなった。当時の宇都宮高農の恩師に、平井鎮夫、横川次郎などの社会科学の先生がおられたらしい。私が、満鉄に奉職してしばらくしてから、おそらく岡川氏の努力もあったことと思うが、平井、横川両氏も大連の満鉄の調査機関にこられて、私も親しく交渉をもつこととなった。さて、岡川さんは、宇都宮高農を卒業後満鉄の調査課に奉職されて満州農業の調査研究に専念され、経調が誕生すると同時に、植民班の主任になられたと記憶している。岡川さんは、終戦後内地に引き揚げられてから、母校である宇都宮大学の事務局長となられたと記憶しているが、あまりにもきびしい学究生活の無理が、わざわざ

したのだと思うが、私が、仙台に赴任して席もまだあたたまらない頃急逝された。

少し前にさかのぼるが、昭和十年に、植民班に私が奉職した頃岡川さんは、大学に学ぶことの夢をすてきれず、京都大学の農林経済学科に在学中で、年に二回ほど大学の期末試験をうけに京都にいかれて、私が、ようやく大連の生活に慣れた昭和十二年頃かに、大学を卒業されたことを憶えている。

さて植民班での私の仕事は、当初は、満州における日本人移民、朝鮮人移民、満人（中国人）の農業経営の調査研究ということで、満鉄の鉄道沿線の産業開発を担当していた各鉄道局（鉄路局といっていた）の産業課（附業課といっていたと思う）に指導を委託して農業簿記をつけさせ、その集計事務を監督するというようなことであつた。中国語に堪能な助手を同行して、奉天、ハルピン、チチハルなどの鉄路局附業課の課員の案内で、簿記の記帳を依頼している農家の帳簿を点検してあるいたことを憶えている。

大連時代に発表した私の文章のうち、記憶にあるもの数篇を記しておきたい。

満鉄調査月報に掲載されたもの二篇をあげると、一つは、^{ホロンバイル}「呼倫貝爾における植民」という文章。これは、昭和十年春に大連にわたってまもなくのことだが、ある日、岡川さんから、奉天医科大学の先生方が、毎年夏休みを利用して、蒙古人の施療を実施しているが本年（昭和十年）は、興安北省の純遊牧地帯を約1ヶ月にわたって施療旅行をするのでそれに同行して遊牧民の経済を調査するよにということ、既に奉天の医科大学には連絡済みで、^{ハイラル}海拉爾で一行と合流する日取りまできまっているのであつた。新入社員として中国語の研修を秩父先生から教わっている最中であり、もう一つ研修課呈として、経調の先輩から講義をうけている頃なので、私もいささかこの唐突の命令にめん喰ったものの、蒙古人、遊牧民といった未知の世界に魅了されて、北満のハルピン、チチハルなどの鉄路局管内の簿記記帳農家を、この機会に巡回しながら初夏の北満の風物を満喫する旅行に出発することとなつた。そのときの調査報告が前記の文章であつた。なんの予備知識もない蒙古人の遊牧地帯を約1ヶ月にわたって旅行したので、大連に帰ってからは、図書室の書物を片っ端しから読みあさったことを想いだす。北満の農業経済については、当時既に、帝政ロシア時代から調査された露文の文献とそれの満鉄社員による翻訳書が、数多くあることも、判つてきた。特に記憶にのこっているのは、ハルピンの東支鉄道の本社を訪ねたところ、松村四郎さん（リュビモフの地代論の翻訳者）にあつて、ヤシノフの著書を読みなさいといつてロシア文の原著をもらつて面喰つたこと、オーエン・ラティモアの「満州における蒙古人」という訳書がたいへん参考になつたこと、アメリカの社会学雑誌に女性の文化人類学者（？）が、興安嶺の山中のヤクト族のトナカイ飼育民のレポートを書いていることなどを参考として、私の大陸におけるアルバイト第一号としても、なつかしいものである。この蒙古旅行の強烈な印象によって、私の研究欲は、その後、満州における少数民族のことに、執心させられてしまつて、日本人移民のことなど、二の次になつたような次第である。

同じく満鉄調査月報に発表したものに、「蒙古人の農業」という実態調査の報告がある。これは、コロンバイルの純遊牧地帯とはちがって、漢民族の農業の文化の影響をうけて定住生活に移行しつつある蒙古人部落の紹介であって、このテーマも、私の研究欲を有頂天にするようなものであった。いま、記憶にあることを一、二記しておく、蒙古人は、午前中牛をつかって犁耕をするが、午後は農耕に従事しないこと、したがって、耕地の面積は、漢人と同じ言葉の^{シャン}晌を使うが、それが午前中に耕作できる範囲という意味であってゲルマン人のモルゲンと同じであること。

原始代田式というのか、地力がおとろえると次の土地に移るが、無主の共有地を占有する証拠として、農耕適地を囲ってそのまん中に、鋤入れ(?)の意味で、現在でも、われわれが、地鎮祭のときに、鋤入れをするのと同じようなことをしておく、他人は、その先占権を主張できないことなどのことを憶えている。

つぎに大連時代に発表した文章として記憶にあるものとして、満州経済年報の昭和十二年度(上)版に、「満州の開拓政策と開拓民の農業経営」(正確な題名ではない)といったものがある。満鉄の経済年報は、私の大学生の頃から刊行されていて、われわれの学会機関誌である「農業経済研究」にも刊行のたびに書評がのるので、私は、その存在を知っていたように思う。ところが、私の文章がのる以前の年報は、経調の第一部のメンバーが執筆にあたり、その主宰者は大上末広さんであって、当時の内地の論壇をにぎわした日本資本主義発達史講座の執筆者たちの論調(いわゆる講座派)の大陸版といった観があった。そのような色彩の年報が、数年つづいて、一応そのような視点からの研究が、一段落したためか、あるいは、マンネリズム化した反省の結果なのか、さらに、昭和十二年以降の言論統制の時代では、もはや講座派流の表現をはばかったせいかは、判らないが、私の執筆した版から、執筆陣の顔ぶれも、がらっと変わり、とり扱う課題もとり扱い方の視角も大上末広時代とは、かわったときの第一号といった編集ぶりであった。年報の過去にはたした実績を考慮して、私としては、檜舞台にのぼった思いで書いたことを思いだす。

もう一つ大連時代のことで記録しておきたいことは、これまた大上末広さんの発案だと記憶しているが、満州でも、農産物の生産費の研究をしなければならないということになり、そのための調査委員会が、経調内に設けられたことである。それより少し前に、満鉄調査月報とは別に満鉄資料彙報(?)という主として調査研究の方法とか、調査研究の今後の予定とかを中心にした月刊誌が、発刊されたと記憶している。当時そのような雑誌の編集は経調とは、別の部局の調査課あるいは資料課といったところの仕事で、そこには、中西功、鈴木小兵衛、石堂清倫といったその方面のベテランがいて、エネルギーをもてあましていたような活気をみせていた。その彙報の方に、私が「農家経済調査の集計方法について」(これまた正確な題名ではない)という文章をのせたのが、大上氏の関心を引いたのか、前記の農産物生産費調査の調査委員会のメンバーに加わることとなった。私のほかに、東大経済学部の出身の岡田一郎君、先輩の内ヶ

崎虔二郎さんが、加わり、委員会の幹事役に和田耕作さん（現民社党代議士）があたられたと記憶している。そこで、私は、近藤康男先生の農産物生産費の研究や小林隆平氏、岡田温氏などの主張をふまえて、農産物生産費の研究上の従来の問題点をレポートさせられたと記憶している。それにたいしてさつそく岡田一郎君から、異論がでて委員会は、暗礁にのりあげて一こうに進捗しないまま、岡田氏が私の植民班でまとめた簿記資料その他をつかって、大きな研究報告をその後出版したと記憶している。私は、昭和十年以降ソ聯の東支鉄道が、接收されて満鉄の経営となって、昭和十二年頃に旧東支鉄道の調査機関の後身として再発足したハルピンの北満経済調査所に岡川栄蔵さんたちと一緒に転出したので、岡田一郎氏の労作は、あとになって知った次第である。

さて岡田氏の論旨を私の記憶をたどって回顧してみると二点に要約されると思う。

第一点は、農業の作付体系は、相互に補完補合の統合関係にあるので、そのような相互関係から切りはなして、一つの作物の生産費を全体の作付体系から切りはなして収支をとりあげることは、無理があること。

第二点として、仮に、一つの作物を作付体系から切りはなしてみても、自給物を評価することは、現実にそくした態度ではない。

一つの経営における、現金部分の収入と支出の対応関係は、作物別には、分離しがたい。

たとえば、一つの作物の生産には、現金支出として購入肥料費として現金支出が計上されても、その作物が自給作物であれば、現金支出は、その作物の価格からは回収されない。その作物の供給価格というものは、その経営にとっては考えられない。

現金支出は、商品化作物の販売価格から回収されればいいので、作物別に収入・支出の対応を考える必要はないばかりでなく、作物別の収支を対応させることは、現実的でない擬制的操作である。

以上のようなのが、岡田氏の論旨だったと思う。ある意味では、一々もつともであってその後ながく、私の宿題となったテーマであった。その後、ハルピンに別れをつけて新京の調査部に転出した昭和十五年頃、満州評論という大連で刊行されている週刊誌に、岡田一郎氏の論旨にそって、農産物生産費問題について一文を草したことがあり、そのころ神谷慶治先生が、新京に来られたので、その一文の論旨を説明して先生の意見をきいたことがあったが、先生の関心は、満州の風物にあったのか、私の質問にたいしては、「むづかしくてわからんよ」といわれて、私を落胆させたことを憶えている。

さて大連には、まる二ケ年いたこととなり、昭和十二年の春に、私はハルピンの北満経済調査所というところに転勤することとなった。ハルピンに移った理由は、昭和十年の夏に吉林、新京、ハルピン、チチハル、^{ハイラル}海拉爾等の北満地方を旅行して、広漠としたそしてまた荒涼とした北満の風物にすっかり魅了させられてしまったのとそのような広漠たる裸の自然に闘いをいどんでいる漢民族や蒙古人の逞ましい生活に惹かれたからだと思う。

したがって北満経済調査所にいた約二年半ぐらいの間は、机にむかって書物を相手にするよ

りも、暇さえあれば農村にでかけるような生活であった。そのような旅行が自由にできたのも、大連から同時にハルピンに移ってこられた岡川栄蔵さんの寛大なはからいによるものと今になって岡川さんの人柄がしのばれる。ハルピン時代に調査した地方は、興安北省の海拉爾から北方にはいった「三河地方」というロシア人地帯の思い出がまづ先に浮んでくる。1回の旅行が3週間ぐらいの長さで前後2回にわたって白系ロシア人の農耕生活に接することができた。

ロシア革命後に革命政権下の生活を嫌って無人のソ満国境を越境してきたコザック騎兵隊の屯田兵ということになるのか。とはいうものの、根っからのスラブ系のお百姓さんといった敬虔なギリシャ正教の信者たちの素朴な農耕民たちであって、コロンバイルのブリヤード蒙古人とは、またちがった魅力を感じさせられた。興安嶺に発する三つの河の流域に、十数ヶ村からなる純然たるロシア人の居住地帯で、原始的な穀草式農業というのであろうか。白樺の丸太を組みあげた欧風の家で、ペチカがありご自慢のサモワールで紅茶をいれてくれるのであった。

ハルピン学院の学生数名が通訳として同行し、そのほかに北満経調の同僚の白系ロシア人も数名同行してもらって、農家に分宿していたから、あけてもくれてもロシア語せめといった生活で、いまでもそのとき聞き覚えたロシア語がいくつか口をついてでてくる。

「^{ドラスチ}こんにちわ、^{ハジャイン}主人^{ドーマ}は在宅か」

「^{バジャウスト}どうぞ^{サジーチエス}おかけ下さい」（ロシア語ではおかけ下さい。どうぞの順になるが）。

部落の中央には、教会堂があり集乳所やバザールがあつて、部落生活の中心街をつくっている。朝には、乳牛をつれて部落の周囲の草地に放し飼いをし、夕方きまった時間に乳牛が帰ってくる。農耕地は、部落から遙かはなれたとこにあつて、春、トラクターで耕起し、機械で播種、覆土すると機械類もそこに置き放したまま秋の収穫期まで、あまり手をかけないといったやり方であった。

三河調査が一段落すると、同僚の佐藤武夫君（東洋大学経済学部教授、故人）の企画で今度は、ソ満国境のアムール河の流域を調査しようということとなり、これは二回にわたって一回が約1ヶ月であった。

まず、黒河省の中心地である黒河市の街から上流地帯を1ヶ月、次に黒河市の下流を1ヶ月ほど調査旅行をした。

このときの印象にのこっていることの二、三を記しておこう。

黒河市の少し手前に璦琿という清朝時代の北満開発の前進拠点・軍事都市がある。その附近の農家を訪れたとき農家の老人が、中国語でない言葉を話すので、それはどこの国の言葉かと尋ねたところ、これが、清朝を興した満州族の母語であることが判った。清朝を興した女真族は、その後漢民族に同化されて言葉は死語となつてしまっていると思っていた私には、おどろきであると同時に新しい発見の歓びのようなものがこみあげてきた。

そのときのことは、満鉄調査月報に「満州族の部落を訪ねて」（？）という旅行記風の一文

として残っている。

もう一つは、アムール河の流域に、日本人が訪れたというので、あちこちの部落で、すっかり中国化してしまった日本人女性のいることを耳にしたことである。新京やハルピンならば、中国人と結婚した女性のことは、格別珍しいことではないが、昭和十三年頃にこのような辺境で、日本人開拓民とは別に、すっかり中国人と同化した日本人のいることはこれまたおどろきであった。いろいろ話をきいてみると、帝政時代末期から沿海州地方に進出していた日本人が、シベリヤ出兵とその失敗後ソ聯領に住めなくなつて、中国領に移住してきた人たちであることが判つた。

会ってみると大正の中期から日本人には、会っていない人が多く、日本語もほとんど忘れているのか、たどたどしい話しぶりであった。

もう一つ忘れられないことは、興安嶺で狩猟生活をしているオロチョンたちが山をおりてきているのに出遇つたことだつた。

銃砲類の定期検査と許可証の書き換えの手続きをとるため、村役場にきたついでに、日用品を買いあさつたり、飯店で飲食している一行なのであつた。

当時訳本がでたシロコゴロフの「ツングース族の社会組織」などを読んでいたので、いろいろ聴取り調査をしたいと思つたが、先を急ぐ旅行なので、その予猶もなく一行と別れてしまつた。

ハルピン時代には、もう一つ満州国政府が成立した直後に日本人によって調査された部落の戸別調査表と対称しつつ、その後の変化を追跡する調査を数ヶ村について実施したことである。そのときの成果は、佐藤武夫君の「満州農業の再編成論」と題して、内地の博文館だったかから出版され、その年度の優秀出版物としてスイセン図書になつてのこつている。黒河省の調査の前半を終つて約1ヶ月ぶりに黒河市に帰つてきたとき、街では、日本軍の武漢攻略を祝つて旗行列で賑つていたことを憶えている。そのような時代のことである。

ハルピンに二年半ほどいて、新京の調査局に移ることとなり、それまでに接した満州農業の概説書として「満州の農業経営」といういままでいえば、新書版を中央公論社から出版したのが、新京に移つた直後と記憶している。

これは、昭和二十一年に引き揚げてきたとき郷里の家にあつたものをいまでも書架に残している。その前後と思うが、博文館から「満州農業図説」という写真集が出版されたがその解説を大連本社の弘報課が企画し、同僚の吉川忠雄君が撮つた貴重な満州の農具類の写真と弘報課提供のものを加えて、佐藤武夫君と私などが解説を分担した。私は、社会生活篇を担当し、そのなかには、私の撮つた数葉も加わっている。当時の北満の豪農には、桁はずれに大きい大家族がいて、私のであつたもつとも大きい一家の写真がのつているが、5・60名だつたと記憶している。そのときは農家調査の戸表の家族人員を記入するときに、はたと困惑して、前庭に全家族にでてもらつて両親とその子弟毎に整列してもらつたことを思いだす。

さて新京時代には、総合調査と称して工鉱業、商業、金融、財政、農業等のグループ毎の共同研究のうちの農業班の責任者となって、研究とともに各班の調整などという会議が多くなって、好きなことを自由に研究することはできなくなった。それでも、内地で刊行されていた「農政」という農業経済と農政の総合誌のような月刊誌と満州国の農業協同組合全国中央会の機関誌である「興農」という雑誌に発表した「北満地方の大経営の性格とその分解」(?)といった論文が、思いがけない反響をよんで、批判されたり、論及される論文がその後あらわれて印象にのこっている。二篇の論文の論旨は、北満の大経営は、多数の雇傭労働を使った商品生産経営ではあるが、一種の大家族的ファミリー・ファームで、家族関係も雇傭関係も擬家父長制的であって、二代目、三代目には、分解して中農に縮小するといったものであったと記憶する。鈴木小兵衛氏(故人)がさっそく、皮肉たっぷりに批評して、「ブドウ酒は、古いものほど珍重されるが、農業を論ずるにも、その古さを珍重する趣味の持ち主がいる。」などといわれたことを覚えている。鈴木氏は、家族は消費の単位であって、家族構造から経営をみるのは、生産視点の重要性を知らないものだともいつていた。当時は、家族というものの見方は、その程度のことが通説であったようだ。

(未完 1972・3・30)